S. Ashina

＊自然神学の社会科学への拡張

１．自然神学とその歴史的展開
２．自然神学の拡張と科学論
２－１：聖書の社会教説　　２－２：聖書の経済・環境思想
２－３：聖書の政治思想　　２－４：自然神学から社会科学へ
２－５：キリスト教思想と科学技術　　２－６：キリスト教思想と生命　1/12
２－７：キリスト教思想と脳科学　1/19

＜前回＞自然神学から社会科学へ

（１）自然神学から社会科学へ

＜問題＞

自然神学が、他者とのコミュニケーションの可能性あるいは公共性に関わるものであるならば、それは、「キリスト教思想と自然科学」という問題領域に限定されないはず。

自然科学から、社会科学そして人文科学へ
キリスト教から、諸宗教へ
↓
今後の方針。まず、「キリスト教思想と社会科学」からはじめる。
社会教説：環境と経済、政治

１．マクグラス：キリスト教から諸宗教へ、自然科学を超えて
Alister E. MacGrath, *Science & Religion. An Introduction*, Blackwell, 1999.
（マクグラス『科学と宗教』教文館）
・キリスト教と物理学・宇宙論、キリスト教と生物学・進化論（→遺伝子工学）
キリスト教と心理学
・心というリアリティ（精神分析学、認知科学、脳神経科学）
↓
社会科学へ？
２．唐沢かおり・戸田山和久編『心と社会を科学する』東京大学出版会、2012 年。

（２）社会科学との接点を求めて、多様な試み

３．キリスト教神学と社会科学（１）
日本キリスト教団出版局・社会科学叢書
鵜川馨『イギリス社会経済史の旅』
森岡清美『家の変貌と祖先の祭』(1984)
住谷一彦『近代経済人の歴史性と現代性』(1984)
永岡薫『デモクラシーへの細い道――イギリスと日本』(1984)
弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』
４．キリスト教神学と社会科学（２）、キリスト教神学と社会学（知識社会学）
Robin Gill, *Theology Shaped by Society. Sociological Theology*. Volume 2, Ashgate, 2012.
Part I is concerned with theology seen through the gaze of the sociology of knowledge. The first three chapters expand upon material from the long-out-of-print Theology and Social

Structure.

Theology as Mere Ideology: Karl Marx / Frederick Engels（The German Ideology）

Theology as General Ideology: Karl Mannheim（Ideology and Utopia）, Max Scheler, Parsons, Merton

Theology versus Ideology: Werner Stark, Berger and Luckmann

Theology as Socially Conctructed Reality: Berger and Luckmann, MacIntyre, Habermas, Ninian Smart,

Critical Theory and Power: Berger, John Milbank, Foucault, Jeremy Carrette

↓

リクール『イデオロギーとユートピア』！

５．キリスト教神学と社会科学（３）、エスノグラフィーと神学

Christian Scharen, Aana Marie Vigen（eds.）, *Ethnography as Christian Theology and Ethics*, Continuum, 2011.

６．土肥昭夫『天皇とキリスト　近現代天皇制とキリスト教の教会史的考察』新教出版社、2012 年。

７．地域教会史論（『歴史の証言　日本プロテスタント・キリスト教史より』）

「地域教会史は、ヨーロッパ、アジアなどの各地、その中に日本といった地域で生まれ、育成された教会の歴史のことである。特に近代以後はそれぞれの地域で固有の歩みがみられる。そこでキリスト教ないし教会の自己同一性と地域性の交錯した地域教会史には、人文科学、社会科学を駆使し、これに神学的な検討を加えた研究が必要になるのである。」(12)

８．キリスト教自然神学の展開・拡張における「キリスト教思想と社会科学」

・キリスト教的知を規定する社会性、イデオロギー批判、知識社会学

キリスト教的知の構成要素としての社会性

知の複合性　→　多様な方法論の連携

心と社会、そして宗教の関係性をめぐる理論構築

・焦点としての「環境と経済」

キリスト教にとっての世界（「神の家族」Eph 2:19 の拡張）

「家」oikos としての世界

世界についての二つの学：eco-logy、eco-nomy

・オイコスの問いとしてのオイコノミア：三位一体とオイコノミア

・オイコノミアと政治の区別：古典的ギリシャの枠組み　→　キリスト教へ

ジョルジョ・アガンベン『王国と栄光――オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社。

８．「オイコノミア」（経綸）と政治神学：統治の二重構造、近代の統治機構を源泉に遡って理解すること(「ミッシェル・フーコーによっておこなわれた統治性の系譜に関する研究の延長線上に位置している」→系譜学、ギリシア哲学から教父思想へ)。

「本研究は、西洋において権力が、「オイコノミア(oikonomia)」という形、つまり人間たちの統治という形を引き受けるようになった、その様態と理由の様態と理由の数々を探究しようと提案するものである」

「三位的オイコノミアという装置が、統治機械の機能と分節化――内的分節化と外的分節化――を観察するにあたっていかに特権的な実験室たりうるかを示す」(9)

９．政治神学 対 オイコノミア神学（ポリスとオイコス）：オイコノミアと生の秩序

「世俗化の問題をめぐる論争」、「ハンス・ブルーメンベルク、カール・レーヴィット」(20)

２―５：キリスト教思想と科学技術

（1）はじめに

１．問題状況

・現代世界の基盤としての科学技術

・３・11 の東日本大震災における原発事故

↓

「問いとしての科学技術」、あるいは「科学技術の神学」の構築の課題

２．「キリスト教」、「科学技術」の多様性をどのように扱うか。

↓

・聖書テキストから、キリスト教の基本教義を基礎にして

・人間存在から科学技術へ（科学技術は人間の営みである）

（2）人間存在から科学技術へ

３．聖書の創造物語と存在論あるいは人間学という二つの軸を設定し、両者を繋ぐ。

（両者の関係は自明ではない。芦名定道「現代思想と〈神〉の問い――ティリッヒからジジェクまで」(『理想』No.688、理想社、2012 年、40-52 頁）を参照。）

４．聖書の創造物語

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。」(創世記 1:27)、「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」(創世記 2:7)、「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。」(創世記 3:6)

（科学技術論としては、創世記のその後の展開が問題となる。特にバベル神話など）

↓

①神の像／支配（創世記 1 章)、②土の塵／耕す／命名（創世記 2 章)、③堕罪（創世記三章)：①と②は、人間存在の有限性、その中で、①は人間存在の善性（伝統的に「創造の善性」）を意味し、②はその善性において成り立つ人間の行為。

土を「耕す」(創世記 2 章 15 節）が「技術」に関連し、「命名」(創世記 2 章 19 節）が「科学」に直結する人間の行為である。→科学技術の原型というべき営み（世界の事象に名を与え、世界の事象を変化させる行為）→聖書の人間理解に従えば、科学技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在の本質に属する。

人間は本来、耕す存在者、つまり「農民」である。(科学技術は、神の創造物が、神の目から見て、すべて善なるものであるということ――「神はお造りなったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」(創世記 1:31）――からの帰結。)

５．③：善なる本質の歪曲＝疎外

↓

人間存在：本質存在と実存存在という二つの規定によって論じる伝統的な存在論的思惟は、聖書の人間理解の哲学的解釈。

この人間理解は、現代神学においても受け継がれている（たとえば、パネンベルク『人間学――神学的考察』教文館、第一部を参照）。

６．ティリッヒ：有限性と疎外、本質と実存との二重性→人間的生（＝人間の現実存在）の両義性（ambiguity）。

芦名定道「ティリッヒ――生の次元論と科学の問題」、現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』創刊号、2000 年、1-16 頁。

↓

人間は善と悪の混合体。原発は悪、ｉＰＳ細胞は善といった議論は可能か、あるいは原子力について兵器と平和利用の分離・区別は可能か。

７．科学技術の光の側面：

耕す人（農民）である原初の人アダムに科学技術の原型を見ることができる。とすれば、科学技術とは、世界創造の始めから人間存在に備わっていた営みであり、本来人間の善性に属する。これは、科学技術に基づく人類の文明がそれ自体としては神の肯定の下にあることを意味する。

科学技術の積極的な意義づけの議論：福島の原発事故以前の原子力の平和利用という議論をキリスト教思想の側において可能にした。現代のｉＰＳ細胞について流布している「善」というイメージにもおそらくは結び付けうる（？）。

島薗進「生命科学のグローバルな競争と国際規制」（『福音と世界』2013.1、新教出版社、14-22 頁）

８．科学技術の影の側面：聖書における文明批判、その前提としての聖書における堕落物語。しかし、人間存在の影の側面と科学技術との関わりを精密に論じるためには、人間存在の存在論的考察に加えて、歴史的パースペクティブを導入することが必要になる。

９．キリスト教と環境危機との関わりを論じる際に不可欠の手続き。

芦名定道『自然神学再考――近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007 年、第 7 章。

10．近代以前と近代以降との間に生じた科学技術の質的変化。

人間存在の両義性における疎外・歪曲の構造性に規定されてはいるが、近代になって顕在化、まさに 20 世紀、劇的な仕方で前面化する。核技術と遺伝子工学。

11．ハンナ・アーレント『人間の条件』

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った。」（アーレント、1994、9）

スプートニク一号の成功が「重要性からいえば、もう一つの出来事、核分裂にも劣らぬ」（同所）事件であるとした上で、その意義・問題性を、「人間の条件」との関わりで論じている。

「人間の条件」を 20 世紀の科学技術は大きく変容させようとしている。

人工衛星が目指す宇宙空間は、「人間の条件の本体そのもの」である地球＝大地から切り離された空間領域であり、ここに顕在化しているのは、この「人間の条件から脱出したいという望み」（同書、11）である。この大地から脱出したいとの欲望こそが、「人間の寿命

を百歳以上に伸ばしたいという希望」、そして原子力と遺伝子工学との背後にあるものなのである。

創世記 3 章の堕罪物語は、この「人間の条件」（＝人間存在の有限性）からの脱出の欲望との関わりで解し得る。

12. ティリッヒ『宗教の未来』所収の講義「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」。「宇宙探検が人間そのものに与える影響」と「宇宙探検が人間の自己理解に与える影響」（ティリッヒ、1999、42）とをテーマ化。

宇宙探検はルネサンスから啓蒙主義に至る「水平線の発見」（＝神や人への奉仕のわざにおいてコスモスを支配し変革しようとする傾向）あるいは「円環と垂直線に対する水平線の勝利」と特徴づけられる近代特有の精神動向に属しており、「十九世紀的な世界的進歩への信仰」はこの線上に位置づけられねばならない。

13. 「宇宙への飛び立ち、そして地球を眼下に見下ろす力を得たことの結果の一つは、一種の人間と地球との間の疎外、人間が地球を対象化（objectification）したことであった。つまり、『母なる大地』から『母なる』という性格を奪ったこと、つまり彼女から、命を与え、養い、抱擁し、彼女のために育て、再び自分のところへ呼び戻す、といった性格を奪ったことである。母なる地球は、完全に計量可能なものとして、観察の対象である大きな物質の塊と化した。」（同書、50）

「大地の非神秘化」の徹底化。原子力技術は、自然界に安定的には存在しない元素を生み出し「外となる自然」の改変を可能にし、遺伝子工学は人間の「内なる自然」の改変を理論的に可能にした＝「人間の条件」の改変のプロセス。

このプロセスは、創造の善性という神の祝福と整合するのかという問い。

14. 現代文明の不安。両義性の不安の徹底化。

「人間の不安感は、詩篇第八篇の時代以来、支配する力の中で自尊心とバランスをとっていたのだが、支配する力の増加とともにかえって増加してきたのである」（同書、四九）

原子力技術を最初に形にした核兵器において、人間は「自分の所有している支配力を、人類の一部だけでなくそのすべてを絶滅させるためにも用いることが出来るという事実」に直面する。そして、「この影は兵器の開発と宇宙探検が互いに結びあわされている限りなくなることはないであろう」（同所）。

神の祝福としての創造の善性を喪失する危機＝人間が人間でなくなる危険。

15. 科学技術の批判的監視者としての役割。

このためには、科学技術に根本的に規定された文明全体を視野に入れることが必要。

科学技術に対するキリスト教的な批判的な眼差しは、科学技術の社会批判（政治と経済）において具体化されねばならない。

16. エリュール（Jacques Ellul, 1912-1994）の一九五四年の『技術社会』上下巻、すぐ書房。（*La technique ou l'enjeu du siecle*, Economica, 1990（1954）.）

・栗林輝夫（関西学院大学）「原子力の神学――エリュールとティヤール・ド・シャルダンを対比して」（日本基督教学会近畿支部会、2013 年 3 月 12 日、神戸国際大学における研究発表）。

・松谷邦英『技術社会を〈超えて〉――ジャック・エリュールの社会哲学』晃洋書房、2010 年。

（３）キリスト教思想にとって科学技術とは何か

17．科学技術の光の面へ。神の創造行為と科学技術との積極的な関係づけをめぐる問題。

賀川豊彦：神と人間との関わり、特に神の摂理と人間の自由との関係性

「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることそれ自体が人間の活動を要求する」（賀川、2009、45）、「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない。」（同書、46）

↓

神の可能性を信じその実現のために行為する人間の働きなしに、神の摂理が自動的に実現すると考えるのは神を機械仕掛けの神にする迷信である。この人間の行為には科学技術も含まれている。

↓

創造論へ

18．創造論：理神論との相違。

・聖書の創造物語から「無からの創造」へ。

・一回的な天地創造（原初的創造 creatio originalis）／世界の存立を支え続ける（継続的創造 creatio continua）／世界を完成へと導く（完成する新しい創造 creatio nova）

・第二の創造として救済行為

Jürgen Moltmann, *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre*, Chr. Kaiser, 1985, S.197-221.（モルトマン『創造における神――生態論　的創造論』新教出　版社、1991 年、283-315 頁。）

波多野精一『宗教哲学』（『宗教哲学序論・宗教哲学　他八篇』岩波文庫、2013 年、434 頁。「第二段の創造」）

19．継続的な創造行為は、奇跡にも関わるが、奇跡に限定されない（あるいはここに強調点はない）。神の行為と世界の内的プロセスとの関係。神の創造行為が生命進化のプロセスを超えて、人間の歴史的営みを通しても継続されると考えることは不可能ではない。

パネンベルクによれば、「自然法則の中断・廃棄」＝奇跡という議論は、近代以降顕著になったもの。

Wolfhart Pannenberg, "The Concept of Miracle", in: *Zygon*, vol.37.no.3（September 2002）

by the Joint Publication　Board of Zygon. pp.759-762.

↓

「12．キリスト教思想と生命」へ

フィリップ・ヘフナーの「創造された共同創造者」（the Created Co-Creator）

（４）むすび

26. 科学技術の両義性とそれに対するキリスト教神学の応答・役割の両義性。
最終判断の終末論的留保。
一ノ瀬正樹の言う「不可断定性」。
一ノ瀬正樹『放射能問題に立ち向かう哲学』筑摩書房、2013 年、
特に第 10 章（209-223 頁）。

＜参考文献１＞

１．ハンナ・アーレント『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994 年。（Hannah Arendt, *The Human Condition*, Second Edition, The University Press of Chicago Press,1998 (1958).）
２．ティリッヒ「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」、パウル・ティリッヒ『宗教の未来』聖学院大学出版会、1999 年、42-58 頁。（Paul Tillich, "The Effects of Space Exploration on Man's Condition and Stature," in: *The Future of Religions*, Greenwood Press, 1966, pp.39-51.）
３．Ronald Cole-Turner, *The New Genesis. Theology and the Genetic Revolution*, Westminster/John Knox Press, 1993.
４．賀川豊彦『友愛の政治経済学』日本生活協同組合連合会、2009 年。（Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.）
５．モルトマン『神学的思考の諸経験――キリスト教神学の道と形』新教出版社、2001 年。（Jürgen Moltmann, *Erfahrungen theologischen Denkens. Wege und Formen christlicher Theologie*, Chr.Kaiser, 1999.）

＜参照文献２＞

１．３・11 の東日本大震災と原発事故・原子力をめぐる、キリスト教思想関連の議論。
・新教出版社編集部編『原発とキリスト教――私たちはこう考える』新教出版社、2011 年。
・日本基督教団救援対策本部編『現代日本の危機とキリスト教――東日本大震災緊急シンポジウム』日本キリスト教団出版局、2012 年。
・新免貢、勝村弘也著、関西神学塾編『滅亡の予感と虚無をいかに生きるのか――聖書に問う』新教出版社、2012 年。
・『基督教思想』編『原子力とわたしたちの未来――韓国キリスト教の視点から』かんよう出版、2012 年。
・森野善右衛門『原子力と人間――３・11 後を教会はどう生きるか』キリスト新聞社、2013 年。
・荒井献、本田哲郎、高橋哲哉『３・11 以後とキリスト教』まぶね舎、2013 年。
２．核とキリスト教
・ティリッヒ「水素爆弾」（1954）、「ベルリンの状況における倫理的問題」（1961）（ティリッヒ『平和の神学　1938-1965』新教出版社、2003 年、所収。Ronald Stone（ed.）, *Theology of Peace. Paul Tillich*, Westminster/John Knox Press, 1990.）

・ゴードン･D・カウフマン『核時代の神学』ヨルダン社、1989 年。（Gordon D. Kaufman, *Theology for a Nuclear Ag*e, The Westminster Press, 1985.）
・福嶋揚『カール・バルト　破局のなかの希望』ぷねうま社、2015 年。